ひかりのこ　霊に燃えて主に仕えよ　1989年5月31日　第24号

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480－72－3883
振替／東京3－128022
印刷／(株)ドモン企画

おとうさん　おかあさん
おにいさん　わたし

ふじぐみ　おおさか　ちさ

霊に燃えて主に仕えよ（ローマ 12・11）

理事長　福島　勲

使徒パウロは何かの病気になやまされていた。あるいは風土病だったとか、またはてんかんだったとかいわれている。

目の悪かったことは事実である（ガラテヤ・6・11）。肉体にとげが与えられていた（第二コリント・12・7）という彼は精神的にも弱り苦しみ、なやんだ。

だれかが弱っているのにわたしも弱らないでおられようか（第二コリント・11・29）、弱さを誇ろう（同12・9）。

幾たびも旅をして道中さまざまな難儀を経験した。道がけわしかったというような難儀は過ぎてしまえば、さほど心に残らないが、人によって蒙る難儀は、心にささって容易に抜けない痛みである。

何のためにこのような難儀を被ったのか、だれからも報いられないで最後は捕らえられて、ローマに送られ、そこで獄死したか、処刑されたかである。

彼が罪を犯したからではない。キリスト・イエスを宣べ伝えることのゆえであった。

この彼を支えたものは、単なる正義感や潔癖性によるものではない。人々の罪をみれば、心が燃え立つとは言っている（第二コリント・11・29）が、決定的な支柱はキリスト・イエスの恵みと聖霊による助けである。

パウロの書翰の中で、霊とか聖霊とかいう字はまことに多い。

御霊に支えられて宣教の大業を果たしたのである。み霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制等である。（ガラ・5・22）といっている。

禅宗のお坊さんたちは、厳しい修養をする、鈴木大拙の言うところによると、霊肉二元の世界に生きるものが、その霊肉の一致、一元化をはかり探り求めての修行であるという。

簡単には霊肉の一致は得られな

い。アウガスチスは、精神が身体に命令すればそのように行動作用するが、精神が精神に命令すると反対があり、敵対があり、戦いがあるといっている。

「私」なるものはいつも分裂していて矛盾し相反し、一致は見難く自分自身の制御は出来ない。善悪双方のとりこになり、内なるものの葛藤ははげしい。

霊に燃える心は、損得利害に由来するのではない。名誉にも限界があり、事の永続への力にはなり得ない。

心を空しくして、神のみ栄えを思い、これに仕え、これに尽くすそして上なる力を仰ぎ、委ね、信じるところで霊に満たされて、はじめて神のみ旨に添う道を歩み得るのである。

厭きっぽく倦み易く疲れて逃避したい衝動にかられるわれわれを引きとめ、新たなる力を与えられて、鷲のように翼をはって飛翔できるものとして下さるのは、まさしくみ霊の働きによることである。

真実に神に仕えてこそ、隣人に仕え得るのである。

一粒の麦

施設長　今関　公雄

まさに、光陰は矢の如く過ぎて光の子どもの家の歩みもこの七月で開設から五年目を迎えます。もう一度原点に返って初心を尋ねなければと思われる昨今です。

この四月から二名が中学に進み小学生は、一年になった七名を加えて十九名、新入園の四名を含めて幼稚園児八名、三歳児一名で定員三十名を満たしています。

この町の公教育の環境は、四小学校と一つの中学校で、光の子どもの家の通学圏は全町に規模を拡大したことになります。子どもとともに光の子どもの家の成長を実感し、これまでの歳月の重さや意味を思わないわけにはいきません。

それにつけても、その創立の一翼を担った福祉施設の創設と草創期の精神性について思いを新たにしております。

光の子どもの家の設立は、年長者と二名の中堅の三名の養護施設職員の決意によって企画され、私を含めた六名がこれに賛同して加わり九名が発起人となり計画を推進しました。「子どものための子どもの施設」のイメージは、施設養育の辛酸をなめた職員にして始めて確固としたものに結晶したと思います。開設に至るまでの彼らの公私にわたる苦闘も、施設養育の内容を当初のイメージに則したものにする上で、必要不可欠なものであったと今にして思います。

最初の三名に続いての当事者となった私は、若干の位相のズレを抱えながら、光の子どもの家の精神的主柱を尋ねながら関わってきました。この間のキー・ワードを私は宗教的視点に関心を持ちつつ見ることで、聖書の「一粒の麦」に思いを致しております。

聖書では「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。」（ヨハネ12・24）とある。このことは、何か新しいことが生まれるためには、誰かが応分の犠牲と代償を払うことを意味しているであろう。

世の常識に従えば、条件の整ったところで仕事が展開される。しかし社会福祉の仕事は、苦難や重荷に出会った者同志が、それを共有し分かち合い、少しでも向上させようとする取り組みから始められる。従って、その展開もまた、いわば「共感・共苦」に則した運用原則となるであろう。

世の親が、わが子の養育に当たる時、自分の分身に対する形見分け乃至遺志継承の思いで関わっているであろう。おそらく最善の関与に努めているに違いない。人の親である私自身の真情でもある。

いま養護施設の真っ只中に身を置く中で「一粒の麦」の言葉の重みをズシリと実感させられている。そして五年目を迎える豊かな実りを覚えつつ、「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ。」（マルコ12・31）との神様の御言葉が自己愛の塊である私に迫ってきます。

生命の讃歌

落合　水尾（俳誌『浮野』主宰）

老人ホームの句会に月に一度出向いている。十人ほどの集まりだが、みんな一生懸命なので楽しい。

この間、老衰で亡くなられた高橋寿呂さんは、若い時に、奥さんと子どもをいっぺんに亡くされるという不幸な体験の持ち主であったが、キリスト教を信じ自然を愛し、心の結晶を句に詠まれて、この世に句集『小豆粥』を遺された。

曼珠沙華どんと淋しき田んぼ道
暖かき高校生の落語かな
老人と三つの鉢のシクラメン
名月の姥捨山に停まる汽車
行水や残り少なき誕生日
死ぬことは損か得かと古袷
幸福で孤独の時は落葉掃く

等、どの句を見ても、一瞬一瞬に心を傾けて生きた、生命の輝きが尊く感じられる。若い頃に読んで感動したという、内藤丈草の「陽炎や墓より外に住むばかり」の句が、寿呂さんの人生に醗酵し、助けと導きに感謝して生きる、創造的な力を生み出したものと思われる。

我々の人生はどこまでも有限ではあるが、生命のかがやきを真に体験しうるかどうかは、まさに、覚悟と知性と情熱に拠るものではなかろうか。

先日の兼題は「犬ふぐり」であった。冬のつづきの野辺に、小さな瑠璃色を見せて、群れて咲く春の草。案外その可憐な花の名を知らない者が多い。老人ホーム句会の皆さんも例外ではなかった。

皆さんは、ある晴れた日に連れ立って野道に探しに出られた。塀の隙や畦のほとりに咲いていた犬ふぐりは、すぐに見つけられたがお年寄りの皆さんは、忘れ物を時を経て見出したような喜びを味わったようである。

八十路にて始めて知りし
犬ふぐり　正原ミネ

心の眼をひらくことの感激、それは、生命の波紋を全身にみなぎらせることである。

お年寄りはどなたも、生活体験をいっぱいにした大きな袋を背負っている。感動を見つけて句に表現することは、大きな袋の中に光を通すことであり、春を感じて囀る鳥や花ひらく草木と同様、生命への讃歌である。

誰の人生にも、前途に不安がないはずはないが、現在生きていることを幸いとして感謝のうちに夢の楽園を享受する作句の道程は、明日へ向かって一歩を踏み出させる、みずみずしい世界である。

正原ミネさんは、昨夜の句会でも、次のような句を作っている。

風船に乗りてゆきたき宇宙かな

天は常に、創造する者に、若々しい生命を与える。それは、それぞれの句の躍動が、明らかに示すところであろう。

春の日の野を廻り来し墓参かな
松本　隆子

待ちわびし良き便り着き花日和
神田　孝一

くすり屋に紙風船を貰ひけり
小川　敏子

これらの句にも生命の輝きが濃厚であり、至福を祝わざるを得ない。

良寛は、禅門に身を置いたが、心の自由を文芸の創造の中に見出して、生命の円やかな彫琢を成した。「裏を見せ表を見せて散るもみじ」は、良寛の辞世の句と言われる。自然のあるがままの姿に学び、自己のかけがえのない生命を表現の中に確かめて生きた、厳にして寛なる人生が、そこには麗しく感受されよう。

表現は生命の讃美にほかならない。表現は俳句に限ったことではないが、何であれ、夢多い人生を拡充するもののようである。

虹の国から

強い風

三年生　山城　滋

きょう　家から出て　学校に行こうとしたら
風が強くて　なかなか行けません
はんちょうが走ったので　くるしかったけど　早く行けました
風がつよくて　ぼうしがとびそうになりました
と中で　この葉が　かおにつきました
つゆがついていて　つめたいでした
すこし風が　よわくなりました
だから　もう一ど　走っていきました
草をけっていったら　つゆがはねて　風がふいていたから
トレーニング・ウェアにかかってしまいました
はんちょうが　走って早くいったから
風がふいていても　ちこくをしないでいけました

現場から

暮らしの風景 2

石毛　照子

子どもたちが学校や幼稚園にいって空っぽになってしまう佐藤家の、階段に面した大きなガラスから、滝のように射し込む午後の日がまぶしくなりました。

そんなある日、子どもたちがやって来た頃からのアルバムを久し振りにひろげていました。

赤ちゃんの面影をいっぱい残してやって来た耀也君も、この春元気に小学校に入学しました。

激情型の耀也君は自分の思いを言葉にできるまで随分時間がかかりました。思いが伝わらず感情が高ぶり「ヤダ！ヤダ！」と繰り返し怒ることの多かった日々・・。

二年振りに訪ねて来てくれた母親を全身で拒否し続けた三才の日。

わけの分からない川崎病という難病に罹り、高熱におかされ、いっしょにした病院での一ヵ月もの闘いの日々・・。

春まだ浅い頃から新しく一年生になる七名の仲間たちと、早朝六時の厳しい風の中、一km余りを毎日走って登下校に備え、三月の末にはがんばったご褒美にこの七人で赤城山へ登り、全員で古びた露天風呂に騒いで楽しみ入学を待ったのでした。

生活の中で、何かにつけて急ぐことを知らなかった耀也君。さっさと起きて身繕いをし、朝食の時間も半分もかからなくなりました。大阪にいるお母さんからお祝いに頂いたランドセルを背負って肌寒い風の中を、大きい子どもたちに囲まれて、ちょっと足早に約四十分の道のりを出かけます。「行ってらっしゃい！がんばってね－」途中の家の陰に隠れた登校の列が出て、また幾つか曲がって続く村道を、見えなくなるまで見送る胸キュンの朝が続いています。

学校という初めての体験の全てが、課題に真っ直ぐに立ち向かっていく強い力を、みんながいっしょに歩くやさしさを、大きく大きく育ててくれますように。そんな願いを持ちつづけ、支えることがいつも出来るよう、私も備えなければと思いを新たにしています。

五才の夏、赤ちゃん言葉で乳児院からやってきた隼文君も三年生です。一年坊主の耀也君に背伸びしながら「ちゃんとしなよ」などと兄貴ぶる隼文君が、「照子さんは結婚しないの？」と真面目に聞きます。指導員の結婚式に招かれたこともあったのでしょう。「結婚したら、ここの六畳に住めばいいよね。わかった。」と念を押します。幼い考えと笑い飛ばせず何となく終わりました。

今でも「おかあさん」と私に甘える隼文君は、佐藤家の最初に受け入れた子どもです。それから毎年辞めていく大人を送っていますどういうわけか一方的に佐藤家の大人が、結婚や病気などで辞めるのです。大人が辞めていく風景に馴れないように心を研ぎ澄ませていなければなりません。家族的処遇と言っても「退職」が「家族」ではないほころびを大きく裂いてしまいます。何よりも、私自身の心がそんなことどもに対して鈍ってしまっていることを感じてしまいます。だから、そんな時、子どもたちに何をしてあげられるのかを思えなくなってしまうことを恐れるのです。そんな心に不安を感じながら、時間だけがすばやく過ぎていってしまいます。

そんな思いに耽っているうちに子どもたちが学校から帰って来る時間になってしまいました。オヤツは何にしようかな、学校で今日は大丈夫だったかな、などと思いながらアルバムをしまいます。

五年目は一区切り、と思ってやって参りました。アッと言う間に過ぎてしまいましたが、随分長く様々なことがらを経験しました。そんな中で、ものごとへの思いの深さや、感性の輝きをスリ減らしてしまったようにも思えます。

『居続けることが光の子どもの家の基本的な仕事』と言われてきました。居続ける中で、きらめくような時を子どもたちとたくさん創り続けられますように。

虹の国から

ふたば

一年生　みなもと　まさし

5がつこのかに
はちに　あさがおのたねをまきました
いつも　あさがきたら　みずをあげています
きょう　ふたばが1ぽんでました
ふたばのいろは　みどりいろでした
かわいいと　おもいました

現場から

輝きかたち　その七

池田　祐子

空の色がやさしくなって　空気がやわらかくなって　梅が咲き桜が　チューリップが咲き　蛇が目を覚まし　蛙が現れ　もうすっかり春に染まりました。

そして　私のグループにも春。渓子ちゃんはピカピカの一年生。高雄君は年長組。

一志ちゃんは幼稚園入園です。去年の今頃は　着替えにカンシャク　ウンチはおもらしの一志ちゃんが幼稚園なんてトテモ・・と思っていた。土筆がまぁるい頭を出す頃は　着替えだって　ウンチだってさっさと自分で出来るようになっていました。

お日さまが笑っていた午後　一志ちゃん　階下のグループの福子ちゃんと私とで　土筆の道を散歩しました。

道端の家の門から猫ちゃんが出てきました。なつっこい猫ちゃんはすり寄ってきます。

「猫ちゃん　どうしたの?」と私。しゃがんでノドを撫ぜてやります。福子ちゃんは不安な顔。一志ちゃんは「猫ちゃん　どうしたの?」と私の真似。「一志ちゃん撫ぜてごらん」と私。おっかなびっくり　猫ちゃんの頭をそーおっと　「猫ちゃんが一志ちゃんの手を舐めた!」と歓声をあげます。今度は福子ちゃん　そーおっと。

猫ちゃん　シッポをふって喜びます。これが耳　これが足　しばらく猫ちゃんの観察です。意外に怖がりもせず仲良しになりました。

一志ちゃんは　去年から原田家の仲間になった入野兄弟の弟の稔君と大の仲良しです。大人にも他の子どもたちにもチンプンカンプンの宇宙語で一生懸命おしゃべりをしています。それでちゃんと会話になっていて　通じ合っているのです。しばしば　一緒に悪戯をします。

「こら!何やっているの!」と怒っても　「ゆうこさんには　関係ないの!」と憎まれ口　負けていません。末っ子の腕白坊主。

一志ちゃんは　夜　私の枕の方に横たわり寝ます。渓子ちゃん高雄君を両脇に寝せるから　「ゆうこさん手つないで寝て」と一志ちゃんが手を伸ばしてくる頃　「ゆうこさん　おてて　もうない。」渓子ちゃん高雄君に両手を占領されて　そんな夜もしばしばです。末っ子には『後で取り戻せる』の思いがあるからです。渓子ちゃんも高雄君も年令が上がり、大きくなって抱っこオンブが不自然になるから『今しかない!』という焦りにとらわれてしまうのです。

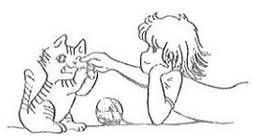
でも　最近　そうなのかなあ?と首をかしげることが多くなりました。一志ちゃんだって　誰だって　みんな　今は『今しかない』のです　それぞれに　そんな関わりが必要なのだと　思い始めました。子ども三人と一緒にいても私と子どもはそれぞれ　一対一新しい年度も課題がたくさん　そんな五年目です。

一志ちゃんのお父さんが　入園式には仕事で出られないと　前日にいらっしゃいました。一志ちゃんが可愛くて　しかたがないお父さんです。仲間と　うなりをあげて　走り回る一志ちゃんを　優しく見守ります。

遊びにもマメに打ち込み　言い出したらきかない職人気質の一志ちゃんです。職人のお父さんと一緒に暮らしていなくても　段々性格や特徴が似てきます。親子や家族のもつ不思議さを思います。

そんな一志ちゃんも　元気に幼稚園に出かけていきます。初めての世界で大活躍の毎日です。

渓子ちゃんも
高雄君も
一志ちゃんも
がんばれ!
がんばろうね
子どもたち



養護メモ 20

自立　その四　入野隆の場合

菅原　哲男

いろいろな事情の子どもたちがここで暮らしている。いろいろと言っても家庭的な事情がその全てである。あるものは、親たちの離婚であり、経済的破綻であり、長期の入院であり、片親か両方の死亡などであり、それらが複合している場合が殆どである。

離婚して子どもを引き取った父親が、働かなければならず、育てられない。そんな理由で子どもが養護施設に入所させられる。だから、父親が再婚したら養護施設に入所させた理由が消滅するから、即引き取りとなるわけなのだが、そうはいかないことが多い。人は人や状況との関わりのなかで生きているので、その状況や関わる人が変化すれば当然、事情も変化していき最初の単純さで問題が解決されるものではないからである。

家庭的な事情が変化していくのと同じように、子どもたちが原田家なり仙道家なりの『家』で生活を始めていくと、子どもたちの事情も変化していくので、それまでの経過の予測を超えて状況は変化していく。またそれまで見えなかった課題などが明らかになってもくるのである。それらを総合して子どもに関するすべての事柄に対応していかなければならない。

入野隆は今年小学校へ入学した。誰でもそうだが、入学前は幼児である。幼児から学童への移行期は特にデリケートな対応が要請される。

他にも何人かいたが、隆はとりわけ朝の目覚めが悪い子どもであった。一度や二度声をかけても目覚めないし、布団を除けてももう一度被って寝てしまう。朝はできるだけ機嫌よく始めさせたいと担当者は思い、なるべく叱ったり怒ったりしないで、同じ部屋であれこれ仕事をしながら幼稚園に間に合うギリギリまで目覚めを待っていた。だから隆のいる原田家はしんがりで幼稚園にすべりこむことが多かった。

三月初旬、新しく小学校へ上がる七名の子どもたちとの入学準備を始めた。小学生は朝七時に登校する。九時頃までに行けばよい幼稚園より二時間も朝の生活が早まる。目覚めて身仕度するところが一日の大きなポイントになる。

大体どこの家も学童は起きて剣道をやっている者は素振りを始めたり、ジョギングに出たり、自分の部屋を掃除したりする。それと同じ時間に起こしてやることを始めたのである。

最初は起きて身仕度するまで四十分もかかっていた。一緒に布団に入ってふざけたりしながら手を変え品を替えてやってみた。なかなかうまくいかない。そのうちに担当者が部屋にいない時の方が早くシャキッとすることに気がついた。そこで、担当者たちに起こすことは私がするから、同じ部屋にいないようにしてくれるように頼んだ。そのかわり、夜眠る時はできるだけ一緒にいて、抱っこしても頬ずりなどもして、十分甘やかしてやって欲しいとも頼んだ。

三週間も過ぎた頃には六時十五分には七名の子どもたちが庭に出てきた。それから、約一km余りをジョギングして六時半頃に学童と一緒に朝食をとれるようになった。今では私の介助は殆どいらないばかりか、時折「遅いよ!」などと気合を入れられてしまう。そんな彼らと四月初旬に赤城山に登り、露天風呂で騒いで入学に備えた。

光の子どもの家では、大雑把に関わりの重心を、幼児の間は受容に、学童は自立に置いてしている。

人が立ち上がることは大変なことなのだとこの頃しきりに思う。昔、生物の講義で這っていた人間が立って生活するまでに何万年も何百万年もかかったと聞いていた。

一人のヒトが大人になるまでの間に獲得しなければならない行為のなかで、起き上がることは、這っていた赤ん坊が立ち歩くようになるほどの訓練と評価、愛情に満ちた受容が必要なのだと思うのである。そんな隆が、いま学校にうまく入り込めなくてトラブル続きである。

この項つづく

日誌抄

二月十六日～四月十五日

二月十七日　羽鳥さんより苺を沢山、金子さんより遊具を頂く
○今年の児童福祉週間の迎え方の検討の委員会発足
○中村調理士による調理講習会を取り敢えず身内から始める
十九日　神奈川県中心学園より加藤田園長先生他六名が見学に法人設立準備当初からのご支援に感謝し旧交を温める
二一日　江森さん散髪のご奉仕
二七日　八九年度個別養護計画の検討で事業計画の策定作業開始
三月一日　羽鳥さん、関東商事より食品をいただく。感謝
○幼稚園へ入る四名が一日入園
三日　幼稚園雛祭お遊戯会。ステキな主役、美しい思い出ができました。お父母さんもきてくれてうれしい一日でした
十一日　大利根剣友会の進級審査それぞれ合格し進級する。
十二日　蓮田の永野さんより中学に上がる二名に英語の辞書を。
十四日　都立第二王子養護学校より見学に来訪。
十八日　劇団四季より子ども向けミュージカル「嵐の中の子どもたち」にご招待。素敵な一夕。
二三日　幼稚園を七名が卒園。お世話になりました。おめでとう
二四日　東大宮教会の原田牧師夫妻が新潟に転任することで歓送会。設立準備の初めから関わりご苦労をおかけした理事。毎月の礼拝を司って下さる。感謝と更によい働きを。心から皆で。
二五日　小学校を二名が卒業。これまでの道のりの思い様々。
○加須市の梅沢さんのご招待で中国からの音楽会に五名。感謝。
○第十八回理事会。新年度の事業計画と予算審議。
二六日　復活祭。教会で礼拝のあと園庭で宝探し。ハレルヤ！
二七日　中学校への二名一日入学。
二八日　国際婦人福祉協会に申請していた、地盤沈下による破損の相次ぐ上下水道・ガスの配管の本格的補修工事への補助の決定通知。新しい法人などの困難な経営を援助して下さる働きに心から感謝。
○小学校修了式。
○今年もがんばった会。去年の四月に園庭の築山に埋めた決意書のカプセルを掘出し、今年の成長と獲得した目標と祝福を皆で分かち合う。本当に一回りも二回りも大きくなりました。みなさまのご支援やお祈りに感謝。
四月一日　関東商事よりいつもの贈り物。感謝。
○ピエロさんからも沢山のパンをありがとうございます。
二日　GOGO会（二・三年生）が正丸峠へハイキング。
○小宮さんより映画のご招待。
四日　新一年生七名のグループを結成し『虹の会』と命名。赤城山へハイキング。期待と不安の交錯する小学校入学へ向けてみんなでがんばるぞ！と早春の山道を登り、下山の途中の露天風呂で裸のつきあいも。
五日　がんばろう会。今年度の目標と決意を表明したカプセルを築山に埋める。楽しみな来春。
八日　小学校入学式。七名入学。
十日　幼稚園入園式。四名入園。
今年度も。ご支援を！　（くら）

反射光

はっきりしない天気が続きますが季節は確実に回っています☆先日ボランティア・グループ『しずくの会』（梅沢三保会長）の方々が風が強くて大変だろうと樫の木の苗を二百本も敷地の北と西側に植えて下さいました☆子どもたちと水をやり大事に育てています☆若い葉が濡れことさらきらめいて強まる日射しを感じさせます☆はっきりしない世の中の奥底に何が起きても不思議でない世紀末的な不気味さを感じられます☆女子高生コンクリート詰め殺人事件もそんな兇々しい世相を一層深めます☆揃って高校中退の無職少年たちの犯行は、はっきりしない教育の状況の子どもたちの将来に重なり胸塞がる思いです☆先生そんなに教えないで、学びたいの（世界五月号）と叫ぶ子どもたちの声や合図に敏感でありたいと思います☆去年からの職員たちの育英資金の積立が百万円を超えました☆明るさの増していく子どもたちの季節とその未来をこそ祈ります。更なるご支援を！　（哲）